特定非営利活動法人
ぷれいす東京

Newsletter
2013年2月号　No.76

CONTENTS

「さまざまな違いを受容し、社員と会社がともに成長していく取組み」.....01
第26回日本エイズ学会学術集会　参加感想文.....02
冊子「Life & Medicine ～日常生活の中で 服薬を続けるヒント～」.....05
LIVING TOGETHER 計画 in the 10th Taiwan LGBT Pride.....06
QOGL ～Quality of Gay Life～　vol.1「ヤセないと、ダメですか？」.....07
ネスト・プログラム.....08
HIV/エイズに関する保健所職員を対象にした
MSMへの理解促進を目的とした研修プログラム.....11
内閣府「東南アジア青年の船」ディスカッションプログラム.....12
部門報告（2012年10～12月）.....12
クレジットカードによる寄付がスタートしました！.....16

「さまざまな違いを受容し、社員と会社がともに成長していく取組み」

日本アイ・ビー・エム株式会社　人事・ダイバーシティー担当　梅田惠

HIV陽性者が当たり前に働ける環境づくり

日本IBM には現在、複数の HIV陽性者がエンジニアや営業といった専門職で活躍しています。所属長や同僚にHIV陽性者であることを伝えている社員もいれば、伝えていない社員もいます。また身体障害者手帳を取得している社員、していない社員と、状況はさまざまで、個人の判断に任されています。つまり、語弊があるかもしれませんが、IBM はHIV を個別に問題視していません。しかし、これは HIV に限ったことではなく、IBM では社員本人から所属長や人事部門に特別な配慮や対応を求められない限りは、特別な対応はしません。従って、HIV陽性者が安心して安全に働き、治療とキャリアの両立がマネージできているのであれば、特に介入はしないのです。

個人の尊重に基づくマネージメント

IBM の新人が研修や職場で最初に教えられるのは、「黙って座って待っていても誰も何も教えてくれないから、まずは自分で考えること、調べること、そして先輩や上司に自分から積極的に聞くこと」ということです。女性であろうと、障害者であろうと、若者であろうと、外国人であろうと、その対応は基本的には変わりません。また、国籍や性別、年齢や障害者といった属性によって行動が制限されたり、強制されることはありません。

こうした社風、企業文化は、IBM が創業当時から掲げてきた３つの企業理念の１つである「個人の尊重」がベースになっています。具体的には、仕事を通じての能力の発揮、発揮された能力・業績の公正な評価、これに基づく昇給・昇進、そして社員の声を十分に聞いてから対応するということです。国籍や性別も性的指向も障害も疾病も、それぞれ個人を特徴づける要素ではありますが、それによって人格や業績を判断されるのではなく、あくまでも発揮された能力や、会社の成長への貢献度、自ら向上しようと努力する意欲などで評価されるべきだというのが IBM の考えであり、それがダイバーシティー推進として引き継がれています。

機会均等＜イコール・オポチュニティー＞

IBM では、「事業活動のあらゆる分野において、人種・国籍・宗教・年齢・性別・身体の障害・性的指向等により、異なった判断や取り扱いをしない＜機会均等＞（イコール・オポチュニティー）の実現に、常に積極的に取り組む」を人事の基本的な指針としています。また、配属についても、女性や障害者だけを集めた特別な組織や、特別な業務は作らず、ノーマライゼーションを貫いています。しかし、機会さえ与えれば人は育つ、というわけではありません。機会均等の考え方は、誰にとっても異論のないものだと思いますが、それを実現するためには、常に、積極的に、意識的に行動を起こすことによって初めて可能となるものだ、というのが IBM の認識であり、また私たちの取り組みの特長です。

全員参加で成長することがIBMの信条

IBM ではどんな社員にも常に公平に「成長すること」が期待されています。ダイバーシティーの推進は自転車と似ていて、漕ぎ続けていなければ倒れてしまいます。ああシンドイ！ という上り坂もありますが、少しずつでも前進を続けたいと思います。

先日、嬉しいことがありました。私が東京都の AIDS週間のイベントにパネリストとして参加したことを知った社員から HIV陽性者であることや、いろいろな思いを話してもらえたことです。一生懸命取り組んでいれば、きっと誰かがどこかでみていてくれる、応援してくれる。そんな風に思える、励まされるできごとでした。今後も積極的に社内外にさまざまな形でダイバーシティーについて発信し、社会とともに、皆様とともに成長していきたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いします。

第26回日本エイズ学会学術集会　参加感想文

「これから、ここから」　福原 寿弥

美しく色づいたイチョウ並木

第26回日本エイズ学会学術集会が、11月24日（土）から26日（月）までの三日間、紅葉の銀杏並木がお出迎えしてくれた、慶応大学の日吉キャンパスにて開催されました。会長がぷれいす東京とも縁の深い樽井正義先生ということだけあって、テーマは「つなぐ　つづける　ささえあう」という趣深いものでした。

臨床分野の話題として、我が国の「治療の手引き」においても、抗HIV療法の早期開始が唱われました。CD4＞500でも治療開始を推奨すると明記されたのです。米国の調査などから、早期にウイルスの増殖を抑えることにより、日和見感染症とは違ったHIV自体による様々な合併症の発生を防ぎ、長期的な予後の改善が望めるとのことでした。以前と比較して薬が飲みやすくなったこともその一因です。また、やはり海外の研究から、治療でウイルスを抑えると、周囲への感染も起きにくくなることが示されました。抗HIV療法は個人の健康をより長く守るだけでなく、周囲への感染の広がりを抑えるという次の段階に入ったとの声も聞かれました。

前述のHIV感染による長期合併症とは、心血管疾患（心筋梗塞や脳梗塞）、慢性腎臓病、骨関連疾患（骨粗鬆症等）、非AIDS関連悪性腫瘍など、一般的には生活習慣や加齢により起こりやすい病態なのですが、陽性者ではそれらがより若年で発症しやすいとのことです。今回はそれらのうち、特にHIV関連神経認知障害（HAND）についてのセッションが多く組まれていました。軽度の認知症状を見つける為の検査方法が検討されているような状況です。

また、早期治療のためには早期発見が不可欠ということで、HIV抗体検査について、医療機関での保険適応が拡大されたとのことでした。何らかの性感染症にかかっていると、HIVの感染リスクも高くなると考えられる訳ですが、今までは現に性感染症にかかっていなければ、HIV検査を同時に保険で請求できなかったのです。それがこれからは性感染症の既往や疑いでも調べられるようになりました。より早い段階での診断機会が増えることが予想されますが、臨床の現場にはまだいろいろな問題が残っていて、一歩前進というところかも知れません。

メイン会場の様子

「HIVになっても薬さえ飲んでいれば大丈夫。」予防啓発活動の中で耳にしそうな意見です。自分自身も告知直後の陽性者には「今は慢性の感染症で、うまく付き合っていく病気ですよ！」と話しています。今回の学会では、今まで以上に『長期』という言葉を意識させられました。「つなぐ　つづける　ささえあう」は、これからかも…。

「PeterのAIDS Goes on!」　池上 千寿子

第26回日本エイズ学会学術集会・総会会長の樽井正義氏

慶応大学文学部哲学科の樽井正義教授が学会長、でも哲学者カントの学会ではなく日本エイズ学会なのですね。これがエイズのエイズたるゆえんです。そして20年来の親友マサヨシのエイズ学会ということでPeter Piot博士がロンドンから馳せ参じてくれました。Piot博士はエボラを発見した感染症の専門家ですが社会医学的活動のリーダーでもあります。1994年横浜国際エイズ会議の共催団体代表として頻繁に来日し横浜会議を支援、1996年からはUNAIDS初代事務局長として15年間エイズの国際対策をけん引してきた文字通りエイズ対策の「顔」です。Piot博士担当を仰せつかった私が「国際エイズ対策の柱は人権だと思うがスピーチはいかに？」とふると「そのとおり！」とのお返事。「エイズ30年：エイズ対策の基盤としての科学と人権」というタイトルで「つなぐ、つづける、ささえあう」の筋道を示してくれました。

ピーター・ピオット氏

感染予防と抗ウイルス剤の開発と提供は30年来の課題ですが、それは医療だけでなく政治、人権、法律などの課題でもあり、科学と人権は別個のものではなく有効につながってこそ意味があること。それをつなぐのは技術やデータではなく人間でありコミュニティやリーダーシップであることを事例を通して熱く語ってくれました。当日、空港から駆け付けてのうちあわせで、抗ウイルス剤の予防投与によりエイズは医学的に解決にむかうというような昨今の言説に対して、「とんでもない、まだまだ課題は山積しているよ」と眉をしかめる。「そうですよね、今年の日本のエイズデーキャンペーンはAIDS Goes on.です」といったら「そりゃいい、スピーチで使おう」とニッコリ。なん

と3度もいれてくれました。

じつは彼、ハワイのハンセン・エイズ対策の精神的支柱となった聖ダミアンの故郷ベルギー出身で、しかもダミアンの生誕地のそばで育ち、子どもの頃から憧れていたのだとか。なんとうれしや、勝手に「ダミアンつながり」を決め込みました。

「愛と涙の授賞式」

特定非営利活動法人akta スタッフ 踊り子

エイズ学会学術集会2日目。

この日はMSM関連の発表が午前中からあり、毎年MSMの発表は午前中で朝早いことが多く眠い目を擦りながら日吉キャンパスに向かうと、気持ちのよい秋晴れの中、キレイな銀杏並木が出迎えてくれました。

午前中のセッションを終え昼食をとった後、午後の部ではアルトマーク賞の受賞式なるものがあり、エイズ学会の中でも最高の賞だそうで、今回の受賞者がなんと我らが市川先生と言うことで、いつも大変お世話になっている先生の晴れ舞台をなんとかみんなでお祝いしたい！ってことで花束の贈呈をすることになり、思いがけずも自分が花束を渡す大役を預ることに！

花束を渡す為に自分だけみんなと離れ、前の方の席で待機。市川先生の話は相変わらず長くて待ちくたびれたのだが、それだけ自分達の活動を沢山の人たちに伝えたいと、自分達以上に想ってくれているんだなぁと感じました。

そしていよいよ花束贈呈。いつもの感じで笑顔の市川先生が出迎えてくれるかなーという予想は大きく裏切られ、そこに待っていたのは涙を流す市川先生の顔でした。先生の言葉にならない想いは自分を抱きしめる形で表してくれました。会場は大歓声と拍手の嵐。

アルトマーク賞授賞式でサプライズの花束
（左：市川誠一氏、右：踊り子さん）

先生がこれまでコミュニティーサイドとどれだけ濃密に関わり信頼関係を築いて来たかがわかる瞬間でした。後で聞いた話ですが、アルトマーク賞で花束の贈呈があったのは今回が初めてだそうで、先生が初めて花束をもらい、自分が初めて花束を渡した人として記念すべき授賞式になりました。

授賞式が終わると会場の外で各コミュニティセンターのスタッフや先生と関わりのある人達が先生を囲んで密かに用意していた色紙をプレゼント。ここでも先生は大号泣の男泣きを見せてくれました。ノンケでありながら、MSMの研究をするのはとても大変で辛いことも沢山あったと思います。アルトマーク賞といった最高の賞と共に、活動を共にしたコミュニティの仲間からも最高の想いを受け取った市川先生の想いが溢れた瞬間なのだと思いました。

たくさんの人に愛されながらの授賞式は終わり、今日の秋晴れの様な気持ちのよい気分で本日の学会は幕を閉じました。

「日々現場で感染者を支えて下さっている皆様に感謝」

ぽっくん

感染が発覚してから5年、改めて自分の抱えている病気について知識を深めこれからに生かしていくための情報収集をたくさんしようという意気込みで、今回スカラシップの支援を受け初めて学会に参加させて頂きました。

様々な口演やシンポジウム、セミナーに参加し話を聞きながら、自分の感染発覚した頃の事が走馬燈のように思い出されてきました。

5年前、白血病の治療で骨髄移植を受ける事になり、術前検査で感染が発覚しました。感染が発覚した事により骨髄移植が延期になり、有無も言わさず服薬が始まりました。お世話になっている病院ではHIV感染者が骨髄移植を受けたといった症例は今まで無く、先生方は治療方針を細かく伝えて下さり不安を取り除いてくれようとしてくれましたが、自分はどうなってしまうのかかなり不安になっていました。ネットで調べるも自分のような症例は無く途方に暮れていたところ、ぷれいす東京の存在を知り、相談に乗って頂いたりPGMに参加させて頂いたりする事で、かなり不安を取り除く事ができ、骨髄移植に臨む事ができました。

シンポジウムで発表する生島

学会では、それぞれの会場で色々な分野の発表やシンポジウムが行われており、情報収集がたくさんできたのはもちろんですが、医療・福祉・行政・NPO、色々な方々がご自分の専門分野で、自分達の病気をサポートするために日々研究や現場で頑張って下さっています。この方々の頑張りや施しに自分は救って頂きましたし、現在も支えられているのだと、改めて「感謝の気持ち」を強く感じた学会でした。

様々な分野で日々感染者を支えて下さっている皆様、本当にありがとうございます。

「HIV感染者が抱える問題を考える」

橘

というタイトルのシンポジウムに、病院に勤める薬剤師として出席しました。「今さら、なんだってまたこんなテーマを」とお思いの方もいることでしょう。ただ、これが薬剤師向けのシンポジウムだったということに、大きな意義を感じました。HIV陽性者の生活や、セクシャルマイノリティについて薬剤師に向けて語られるという機会は、今までほとんどなかったのではないかと思います。

薬剤師というと、どういうイメージですか？

「薬、ちゃんと飲めてますか？」

「はい」

「薬剤耐性ウイルスの発生を抑えるために、薬を欠かさず飲むことが重要です」

「知ってます」

「ですよねー……」

もちろんこれは極端な例で、実際はもっと色々と話し合うことはあるのですが、どうも会話が上滑りするというか、お互い何を話していいのか、何を聞いていいのか、

私などは自分のコミュニケーション能力のなさを棚に上げて、何か物足りない思いがありました。

そんな中、私事ではあるのですが、今年の秋、ぷれいす東京のボランティア合同研修に参加する機会があり、陽性者支援のNGOの方と知り合うことができました。その中で、今までは、「薬」という切り口でしかHIVについて見ていなかったけれど、それ以外にも様々な関わり方があるのだということに気付かされました。なので、今年のエイズ学会は、臨床分野の発表ばかり聞いていた去年とは違って、社会分野の発表も聞いて、もっと幅広く陽性者支援について知ろうと思っていました。そこにこのシンポジウムがあり、陽性者の、薬物にまつわる率直な話を聞くことができて良かったと思います。もっと早くこういう話を聞きたかったとさえ思いました。

「薬ちゃんと飲めてますか？」と聞くだけ。飲んでいればそれでよしというただの薬の番人から一歩先へ進んで、薬という「モノ」から、それを飲んでいる「人」へ、もっと深いところで寄り添っていければいいなと思っています。

ポスターセッションの会場

「HIVを取り巻く地元の環境を変えたくて」

SHIGE☆KICK

今回の日吉での学会。その中の一つ、カウンセリングの演題に参加したときのこと。ある発表者の方が、HIV専門のカウンセラーが設置されているか否かの都道府県マップを表示していた。自分の住む県に、専門カウンセラーは設置されていない。しかし、設置されていないのはごくわずかの県のみ。それを知ったとき、同時に不公平さを訴えたくなるかのような腹立たしさが込み上げ、思わず発表者の方に質問を投げかけた。「いつになれば自分の県に専門カウンセラーは設置されるのか？」と。

実は、2011年春先のこと。個人的に地元のHIVに関する対応のあり方（病院や行政等）に関心を持つようになり、まずは現状把握のためと各機関の担当者の方とやり取りをしていたことがあった。そこから知ったことは、HIVに関する専門職（拠点病院の先生以外）の人は県内にいないということ。他の都道府県などと違って、面と向かって相談できる専門の人が自分の県にはいないんだ…そう思うと、一種の疎外感を感じるようになっていた。

それもあってなのだろうか。自分でもよくわからないが、質問を投げかけている途中にそれまでの様々な思いやらが蘇ってきて、その場で泣いてしまった…。しかし、その会場内には同じ東北のとある病院の先生、そして、臨床心理士さんがいらっしゃって、演題終了後に私のところに駆け寄ってきてくれた。そのときの言葉「あなたの発表を聞いて、すぐに対応をしなければいけないと思った」そのような言葉だった。私はものすごく嬉しかった。

同時に、リスクを抱えながらも地方に住む当事者自らが働きかけをしないことには、動くものも動かないのだろうかとも思えた瞬間だった。その後、この病院の先生とは、何度かメールのやり取りをさせてもらっている。今後、良い形で地元の陽性者が生活しやすい環境が整っていけばいいなと思うところです。

「地域の実情、生活、当事者性から発信されたエイズ学会の“わくわく”さ」

杏林大学看護学科　大木 幸子

ラパトア（まとめ報告）をする大木氏

「こんなにしっかり抄録を読んだのは初めてです。」というのが、今回の正直な感想です。というのも必然の理由があり、今回、私は最終日に予定されているラパトア（まとめ報告）の社会系セッションを担当するというミッションを負っていました。そのため、座長を始め多くの方々のご協力を得て社会系セッションでの報告を概観することができました。（ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。）

それらの作業をとおして感じたことは3点です。

1点目は、地方の取り組みの報告についてです。これまで取り組まれてきた都市部での先駆的活動の評価が報告される一方で、多様なテーマと領域に関する地方での地域の実情に応じた取り組みが、報告されていました。

2点目は、ネットワークについてです。HIV陽性者を支援するネットワークは、これまでブロック拠点病院を中心に広域なネットワークがつくられてきました。今学会では、各都道府県に設置された中核拠点病院からの報告が多くみられ、生活圏域のネットワークに焦点があてられていました。

3点目は、HIV陽性者の支援課題について、病態的な課題に留まらず、人生や生活の課題に関する報告が多くみられました。しかも、支援者による枠組みではなく当事者の視点によって課題を組み立てられた報告が複数ありました。こうした当事者からの報告が、学会という場をとおして、支援者や実践者、研究者とともに議論され、共有されていくことは、当事者性を中核にした実践知につながっていくのだと感じられる、わくわくする体験でした。

今回の学会は横浜であったこともあり、私が勤めている大学の学生や卒業生にも参加のお誘いをしました。彼らの感想は、異口同音に「おもしろい学会ですね。」というものでした。理由は、「学会」という響きでは想像できない多様な人々の参加と多様な立場からの議論をさしてのことでした。基礎と臨床と社会という3つの枠組みで、研究者、実践者、当事者が集う複眼性こそが、エイズ学会の魅力だと思います。その良さが、さらに活かされるように、ボーダレスな越境しあった議論が一層発展していくといいなと思いました。

冊子「Life & Medicine ～日常生活の中で 服薬を続けるヒント～」

ぷれいす東京が2012年にヤンセンファーマ株式会社の委託により実施した、HIV陽性者の生活と服薬継続に関する一連の調査から、服薬支援ツールを作成しました。

「HIV陽性者の服薬支援冊子が完成しました！」

抗HIV薬の開発・進歩により、HIV陽性になっても早めにそのことに気づいて適切な治療を行うと、長期間、健康状態を維持することが可能になっています。では、ある程度長期にわたって抗HIV薬を飲みながら生活を送ることが前提となる中、日々の生活で薬とつき合っていくこと――飲みやすいレジメンの選択や、飲み忘れ防止の工夫をしたり、服薬の都合にあわせて外出の予定を組んだり etc.――とはどんなことなのでしょうか。

製薬会社ヤンセンファーマ株式会社の委託により、ぷれいす東京が2012年3月から行っていた「HIV陽性者の生活と服薬アドヒアランスに関する調査」プロジェクトが、調査結果をまとめた冊子の完成と第26回日本エイズ学会学術集会・総会での報告をもって終了しました。HIV陽性者の服薬を生活者の視点から支援していくことを目的に、陽性者20名に対するインタビュー調査と、当事者団体・支援団体の協力を得て全国の陽性者151名から回答を得たアンケート調査を実施しています。調査にご協力いただた皆様、冊子制作にご尽力いただいた皆様には、この場を借りてあらためてお礼申し上げます。

学会のセミナーでは、日本の陽性者の服薬遵守率はアメリカなどと比べ非常に高いことが話題になりました。今回のアンケート調査の回答者も8割近くが問題なく服薬継続中であると回答していますが、同じ「問題なく服薬できている」人でも、特段に負担も感じずに服薬を継続している人と、服薬継続のために何かを犠牲にして努力している人までそれぞれです。服薬を忘れないために、目立つところに薬を置いていたり周囲にリマインドをしてもらったりしている人もいれば、逆に、覚えていても人目があると飲むことができず服薬予定時間を過ぎてしまったという経験がある人も。そんな多様な生活者としてのHIV陽性者の姿が見えてきた調査でした。

調査の見どころは、服薬中のHIV陽性者にとって何が服薬継続のモチベーションとなっているかです。服薬の効果が直接的に表れる体調面だけでなく、体調がある程度維持されることにより実現する趣味や社会活動、周囲との人間関係が服薬継続の励みや動機になっているという人も少なくありません。生活スタイルや、その中で何を重視するかといったバランスなど、HIV陽性者のぞれぞれの生活者としての視点によりそっていくことが、医療者を含めた陽性者の服薬継続を支援する側には求められているともいえます。

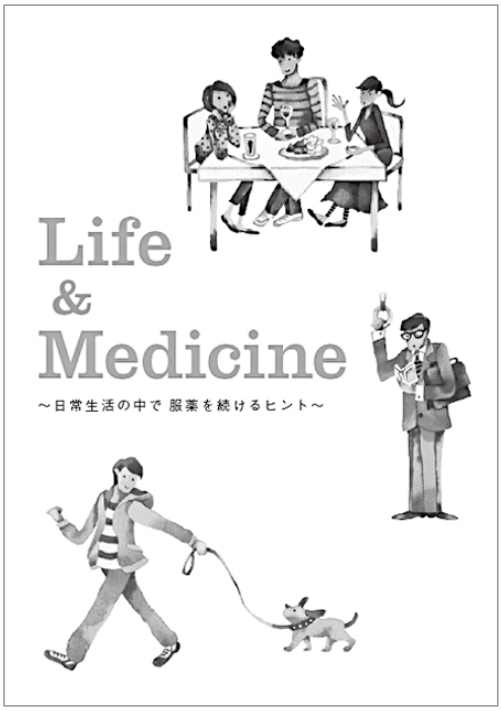
服薬の開始や種類変更を控えている人には、生活の中でうまく服薬を続ける工夫などのアイディアを、そして日々順調に服薬を続けている人にもそうでない人にも、服薬と生活について振り返って考えてみるきっかけなどにこの冊子がなれば幸いです。

なお、冊子のリリースにあわせ11月14日（水）にはヤンセンファーマ社によるメディア向けセミナーが開催され、生島が調査結果を含め講演を行いました。また、当日参加した毎日新聞と中日新聞によりぷれいす東京が取材され、11月末に各紙で記事が掲載されるなど、企業とのタイアップによる効果の大きな広がりを見ることもできたプロジェクトでした。（報告：大槻）

もくじ

- はじめに
- 毎日服薬を続けることがとても大切です。

1. 薬の選択
2. 副作用との付き合い方
3. モチベーション
4. 飲み忘れないために
5. 薬の変更
6. あなたを支える医療者たち
7. 情報のフォローアップ
8. 日常の中で



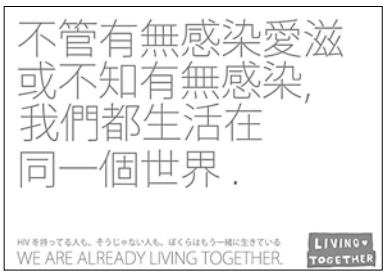
A5／カラー／40ページ
発　　行：ヤンセンファーマ株式会社
制　　作：ぷれいす東京（生島、大槻）
編　　集：永易至文
デザイン：新藤岳史
イラスト：モリケイ

- ぷれいす東京の事務所およびネスト・プログラム開始時などに配布しています。
- PDF版は以下のWebサイトで閲覧・ダウンロードできます。

http://www.janssen.co.jp/sickness/hiv

LIVING TOGETHER 計画 in the 10th Taiwan LGBT Pride

2012年10月26日～29日まで台北にて、5万人が参加して開催されたアジアで最大のゲイパレードにて、中国語による「LIVING TOGETHER」メッセージの発信を行なった。



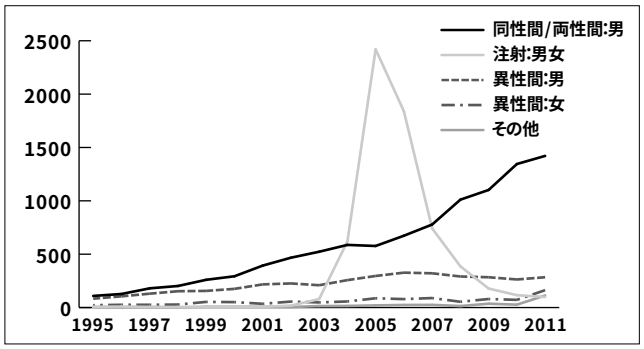
LIVING TOGETHER メッセージの中国語訳

参加の呼びかけはLIVING TOGETHER計画のメーリングリストでスタートし、ぷれいす東京、JaNP+、aktaの各スタッフが参加した。中国語への翻訳、通訳などの言語サポートは、鈴木ケン氏、おかべよしひろ氏、初田氏などの協力を得た。また、LIVING TOGETHER計画の中国語による横断幕とパネルのデザインを張由紀夫氏が引き受けてくれた。

Taiwan Lourdes Association 事務所での集合写真。 相談、ケア、ピア活動などを展開しているNGO。 パレードでは彼らの隊列に参加。

今回の3泊4日のスケジュールで、台湾LGBTプライドパレードへの参加、3つのNGOとの交流などを行った。訪問したNGOは、主にHIV陽性者の支援などを行う団体、そしてHIV陽性者の当事者グループ、HIVの検査や啓発などを主に行う3団体であった。訪問先の選択は、JaNP+の長谷川さんの情報を参考にした。ここにその一部を報告させていただく。

台湾と聞くと、薬物によるHIV感染爆発を思い浮かべる人も多いと思う。しかし現在、最も多く感染が報告されているのはMSM（男性とセックスをする男性）だ。台湾の人口は2300万人、日本は1億2700万人なので、日本の約6分の1だ。そのなかで、最近では、1年に2000人が新規の感染者として報告されており、そのうちの1400人以上がMSMなのだ。



主な感染ルートは薬物使用者からMSMへと変化

台湾では、現在、エイズ対策費のなかから、抗HIV薬が無料で配布されている。しかし、年2000人のHIV陽性者の増加で、予算がパンクしてしまい、今後は健康保険による給付へと移行が検討されているという。

プライドパレードへの参加にあたっては、HIV陽性者への支援を行なう、Taiwan Lourdes Associationの隊列に参加した。パレード全体の運営はとてもアバウトで、とにかくゆるい。パレード参加者も、沿道にもすごい人数がいる。真夏のような天気のなかでの3時間の歩行だったのだが、みなさん元気一杯だった。翌日の報道をみると、参加者はなんと5万人以上だという。台湾では、同性間の結婚を制度のなかに、どう位置づけるかが議論されているようで、このパレードでもその実現がテーマとなっていた。この隊列にも、それにふさわしい二人が参加していた。

日本から同行したNGOスタッフとその友達たち。

日本人ゲイの知人から聞いた話だが、何げない会話のなかで、自分には陽性の友達が数人いると、台湾人の若い友人に伝えたら、とてもビックリされたという。僕の周囲にいる台湾人も同様のことを話す。MSMのなかで、これだけの大きな感染拡大がおきているにもかかわらず、HIV陽性者は周囲にそれが伝えにくい状況が台北にはあるのかもしれない。思いかえせば、この東京も10数年前までは同じだったが、かなり大きな変化が起きている。

隊列の最後で歩く二人。見ている人たちも幸せな気持ちに。

この状況に「HIVをもっている人もそうでない人も、僕らはもう、すでに一緒に生きている」というLIVING TOGETHERのメッセージを伝えることで、何か一石を投じることができたらと今回のアクションを発案した。Facebookにて、中国語のフラッグを紹介したところ、当事者団体、支援者団体の方々に広がり、多くの画像のシェアが行なわれたのは、とてもうれしい反応であった。

しかし、難しさも感じた。台湾CDC（衛生署疾病管制局）高官との食事会を台湾AIDS Foundationの方がセッティングをしてくれたのだが、そこには、同性間の結婚に関する活動家も参加していた。両者が言うのは、まずは、同性愛者などへの理解促進、差別の解消が先決で、MSMに限定したHIV予防対策の強化は差別偏見を助長

することにつながるのではという語りであった。そういえば、日本のLGBT活動家たちのなかでも同様の、あえてHIVについて触れないというスタンスをとっている人がいるのは共通しているように思う。しかし、台湾においては、MSMのなかであれだけ大きな感染拡大が起きている訳なので、今後とも、状況の変化に注目していきたい。

（報告：生島）

[訪問先]
Taiwan Lourdes Association
（社團法人臺灣露德協會）

Persons with HIV/AIDS Rights Advocacy Association Taiwan
（中華民國愛滋感染者權益促進會）

Taiwan AIDS Foundation
（財團法人台灣紅絲帶基金會）

QOGL ～Quality of Gay Life～ vol.1「ヤセないと、ダメですか？」

Gフレの新しいイベント「QOGL」の第1回が、11月3日（祝）に新宿区戸塚地域センターで開催されました。毎回ゲイ・バイセクシュアル男性の健康や生活の質に関わるトピックを取り上げるこのシリーズ、初回は「メタボリックシンドローム」をテーマに開催されました。

新しく始まった「QOGL」は、HIVをメインテーマにしたイベントだとなかなか足が向かない人にも興味を持ってもらえるように、という狙いで企画しました。ご出演いただいた都立駒込病院の内分泌代謝科の関谷綾子先生、コメンテーターのモウシンさんとヤマコさん、そしてGフレはもちろんぷれいす東京のスタッフのご協力をいただき、進行役の僕自身は反省点が多々あったものの、この方向で良かったと感じられるイベントになりました。

イベントの前半では関谷先生にメタボリックシンドロームや糖尿病についてのレクチャーをいただき、後半は「健康的に太ることはできるの？」「マッチョは健康といっていいの？」というような、一部のゲイ・バイセクシュアル男性にとっては「理想の体型」についてモウシンさんとヤマコさんを交えてクロストーク、さらに質疑応答という構成にしました。HIVに関するインフォメーションとしては、東京都のエイズ予防月間直前の開催ということで、検査情報などの資材配布やヤローページの告知などを行いました。

来場者は13人でもう少し増えてほしかったところではありますが、テーマが明確なぶん関心のある方ばかり来られたということなのか、質疑応答も「ちょっと太っていたほうが長生き説」やら「睡眠時無呼吸症との関係」など突っ込んだ質問が多く、アンケートでも満足していただけた方が多かった印象です。また、ぷれいす東京やHIV関連のイベントには初めてという方がおられたり、年齢層も40代、50代の方もお越しくださいました。

次回以降は広報など改善しながら、定期的に続けられるイベントに育てていきたいと思います。

（報告：sakura）

村田ポコさんのイラストによるフライヤー

「やっぱりエロなのよ！」　ヤマコ

今回イベントのコメンテーターで参加させていただきました。どんな先生がいらっしゃるのか事前に情報をと病院のホームページに。先生のプロフィールだけ顔のイラストがないの。他の先生方のプロフィールにはかわいい顔のイラストがあるのに…イジメられてるのかしらといらん心配をしながら当日を迎えました。

柔らかく優しい先生、これが関谷先生の第一印象。講義の説明もわかりやすい。が、やっぱりGフレに来ていただくだけある。説明の中にパンチの効いた本音トークが！でもスライドの内容で、関谷先生はスルーした、ED。あたしは見逃さなかったわ（笑）。休憩時間にモウシンさんと作戦練って、「糖尿病は血管がもろくなりやすいから、ED薬使ったら身体に負担かかりやすいんじゃないかしら？」と。そんなあたりを質問コーナーで突っ込んでみたり、マッチョは本当に健康なのか、みんなが知りたい、あたしも知りたいところを関谷先生に解説していただきました。

関谷先生これに懲りずにまたわかりやすい講義をよろしくお願いしますね。（パンチの効いた爆弾トーク、もとい本音トークを知りたい方は是非参加してみてくださいね。いろいろわかって、質問もできるし、楽しいわよん！）

「頑張りましょー！」　ゆうじ

今日は男性オンリーの会、どんな人たちが集まるのかなー？と、楽しみにしながら会場設定をしていた。そして早速、いらしたのが女性！　ドキッ…不覚にも緊張した。と、思いきや、講師の関谷先生でした。

ご挨拶の後、講義「ヤセないと、ダメですか？」。受講の皆さんは真剣にメモをとっている。真面目な人達が沢山集まったのだ。けれど見渡してみると、美味しそうな程？の人は何故かいない？…？？？　などと考えていてはダメ。先生のお話を真剣に聞いた。

一番大事なのは血糖値を低く抑える事。そのために日頃から食事と運動に気を付けましょう。この条件をクリアした上で、如何に美味しそうになるかが要点、との事。

奥の深い講義でした。みなさーん、頑張りましょー！

ネスト・プログラム

新プログラム「U40ミーティング」、久しぶりに開催された「年末パーティ」なども加わりネスト・プログラムが盛りだくさんです。9月に行われた第17回「カップル交流会」、11月に行われた第12回「Women's Salon」とあわせて、大勢の参加者やゲスト、スタッフからの感想文や報告をお届けします。

U40ミーティング
～10代から30代の男性HIV陽性者のミーティング～

U40ミーティングは、昨年の10月に始まったまだ新しいプログラムです。10代～30代の男性HIV陽性者の方（セクシュアリティは問いません）を対象としています。今までのネスト・プログラムには、40代以下の若い世代が自由に話せる場がありませんでした。そうした場を求める多数の声が、このプログラムを立ち上げたきっかけです。これまでグループミーティングには出たことがない…、グループで話すのは苦手という方でも、先輩の陽性者が進行のお手伝いをしますので、気軽にご参加いただけます。

何回か開催してみて、あっと言う間に時間が経ってしまう感じで、「もっと話したかった」という参加者の声をよく耳にします。集まったみなさんで、日頃感じていることや、話したいと思っていることを中心に進めて行きますが、自分を偽らないで話せる貴重な場所になっているようです。今後も毎月1回ペースで開催することが決まりました。（加藤／佐藤）

参加感想文

★　今回、ネスト・プログラム「U40ミーティング」に参加させて頂き、なかなか同じ状況下で同年代の方と話す機会も少なかったこともあり、色々と疑問に感じていた事を伺う事ができ、とても良いプログラムでした。

内容は、病気が発覚した当時の事であったり、投薬の種類やその副作用での困りごと等、皆が不安に抱えている話を討論しました。自身も発覚当時は右も左もわからず不安な日々もあり、こういったプログラムに早い段階で参加していれば、拭えた不安もあっただろうなと感じました

また固い内容だけではなく、恋愛の話であったりと砕けた話もできたので、和気あいあいと楽しい時間であっという間に時間が過ぎてしまいました。また機会が合えば是非参加したいと思います。

（アップル：20代／告知年2011年／服薬歴1年／プログラム歴 初参加／前職で障害が発覚し現在、転職活動中）

★　私は、告知を受けて約一年半が経ち、服薬も丸一年を過ぎた頃です。以前、新陽性者PGMにも参加させて頂きましたが、まだ告知から半年近くということもあり、些細な疑問もそこまで生まれずに目先の「情報」を知りたかっただけだったと思います。

少しずつ身体的にも精神的にも落ち着いてきた最近になって、些細な疑問を問いかけられる場所があれば、と思いました。そんな中、年齢が近い陽性者の方々と話せる機会があるということで参加を決めました。

率直に、楽しかったです。普段の生活のこと、仕事・就職のこと、服薬のこと、主治医との関係性、パートナーとのこと。限られた2時間では少し足りないかなと思うくらい、濃密な時間だったと思います。

（XJ：20代／告知年 2011年／服薬歴1年）

★　PGMをきっかけとしてぷれいす東京のネスト・プログラムに参加するようになりました。今回、司会進行をされた陽性者の方からこのミーティングの事を教えていただいて、自分と近い年代の方とお話がしたくて、参加してみました。

夕方の喧騒から離れて、落ち着いた雰囲気の室内に8名が集まって、ゆったり過ごしながら始まりました。まず簡単な自己紹介を兼ねたアイスブレイクがあり、その後は1人が出したテーマについて、みんなで話し始めました。場が暖まってくると次々とテーマが飛び出してきて、それぞれの語り口も積極的になり、時間があっという間に過ぎてしまいました。

私が参加したPGMも確かこんな感じだったなぁーそんな印象を受けました。今になって思えば、「HIV感染を知って6ヶ月以内の陽性者」か「10代-30代の男性HIV陽性者」かの違いだけで、陽性者が安全な場所で語り合えるという点では同じなんですよね。そういった場を提供していただけたことにとても感謝しています。

服薬に関する不安であるとか、今後の恋愛についてなど、盛り上がったテーマも幾つかあって興味津々でした。率直な意見が結構飛び出したので、他の人はこんな風に考えているんだと分かった部分もあって、今後の参考になりました。今回は少人数でしたが、次回以降はどのような変化を見せるか、楽しみです。都合の付くときにはまた参加してみようと思います。

（ケータ：30代前半／首都圏在住／服薬歴3年）

第12回 Women's Salon
「エイズ国際会議に参加をして～女性陽性者の視点から～」

11月17日に第12回のWomen's Salonが行われました。今回は、2012年7月にアメリカのワシントンDCで開催された、第19回国際エイズ会議に参加した女性陽性者をゲストにお招きしました。参加者は8名でした。ゲストと参加者2名の感想文をお届けします。

ゲストの女性陽性者より
「エイズ国際会議、そしてWomen's Salon」

Women's Salonの当日は、とても冷たい大粒の雨の降る日であった。そんな中8人もの方にお集まりいただいた。昨年ワシントンDCで開催された国際エイズ会議に参加して感じたことをお話しさせていただいた。みなさんにはもっとビジュアルな形で国際会議の内容を知っていただいた方が良かったかなと反省し、会議の雰囲気や熱気をお伝えしきれなかったかもしれないと後悔した。また報告会の後もみなさんとお話をすることが出来なかったことも残念に思っている。

国際会議では女性の立場を論じるセッションが多種あり勉強になった。母子感染、結婚を考えている女性向けセッション、国別に異なる出産時・出産後のガイドライン、女性の生き方など、精神的・実務的アプローチに基づいて構成されていた。どうやら世界的にHIVの持つ「不名誉なイメージ」に女性の方がより傷つけられやすいようだ。HIV患者は自己責任という言葉の圧力を受ける。感染した人間が悪いのだという圧力。自分で自分を守れなかったという後悔や嫌悪感。このような意識はより男性やゲイの人々よりも強く女性を苦しませているらしい。

男も女も私たちそれぞれが幸せになる権利、必要なものを得る権利は平等になった。けれど幸せになるための役割は一緒ではないはずだ。雇用機会均等法で割り当てられるように役割が一緒だったら幸せなのだろうか？
私は男性と同じ人生を歩みたいとはこれっぽっちも思わないし、だから女性という性で生きている以上女性特有の悩みがあって当然であると思う。

恋人やパートナーを探している、離婚してからHIVが分かった、結婚して子供を欲しい、子育てをしているなど、様々なステージに悩みはある。HIV女性が女性の幸せを追及するには、私たちが私たち自身の手で自ら問題を明らかにし、声を上げる必要があるのだろう。これがアメリカでの国際会議で受けた一番の女性向けメッセージだった。

みなさんとまたお話をする機会を楽しみにしている。

Women's Salon参加者より

★　感染判明から半年がたち、恋愛や結婚、仕事、将来のことなど他の女性と話がしたいと思っていたので、今回初めてWomen's Salonに参加しました。

ミーティングに参加して、なにより、気持ちが軽くなりました。自分一人で考えて落ちこんだり悩んだりするより、みんなで体験や気持ち、悩みを共有することでこんなにも気持ちが楽になるということを実感しました。人の力ってすごいです。

ミーティングは、まず自己紹介を含めたフリートークから始まり、その後講師の方からエイズ国際会議についてのお話を聞きました。雰囲気ですが、堅苦しくなく、かといって砕けすぎず、一人ひとりが他メンバーの話や意見を尊重しあう。その場にいる全員がお互いを気遣ってくれる、そのような暖かいものを感じました。初参加でしたが、フレンドリーな中で、リラックスし打ち解けて話すことができました。また、一人ひとり生活環境や立場、感染が判明してからの年数など状況が異なる中で、いろいろな人の意見や考え方を聞くことで、前向きになれた気がします。

なにより、参加メンバーがみなさん素敵な方でしたので、HIV陽性かそうでないかは人の魅力には関係がないと思えるようになり、自分を卑下することが減ったと思います。これは良い意味での気持ちの変化だったと思っています。

また参加したいです。　（ペンネーム：B）

★　ぷれいすの女性の会はかなり久々の参加でした。と言っても私はキャリアが長くプライベートでも陽性の友達との交流は多い方なので、今回の会でもほとんどの方が顔見知りでした。数年ぶりに会えた友達の結婚報告、さらに妊娠に向けて準備中の話や、数ヶ月ぶりに会えた友達が告知をした上で彼氏ができたなどの嬉しいニュースにキャーキャー喜んでいました。二人とも悩んでいた時期も見てたのでホントに嬉しいデス。

多目的室のベランダで咲いた花がテーブルに

そしてこの日お話しして頂いた女性、とても聡明で温かい方でした。世界レベルのお話に聞き入ってしまいました。一番印象に残ったエピソードは、彼女が同じ陽性者に会った時、何も語らずとも一瞬で解り合えて気持ちが分かち合えたということ。世界中に思いを分かち合える仲間がいるんだ！って嬉しくなりました。

同じ陽性者の方との交流は何とも言えない安心感?ほっと出来るひとときです。そして元気を取り戻して行く仲間を見るのが趣味のベテラン陽性者の私です。今年もたくさんお世話になりました。来年もどうぞ宜しくお願い致します。　（ぽんず　病歴20年 30代）

第17回 カップル交流会「終わりゆく夏を惜しみながらバーベキュー」

9月2日に（＋/＋）（＋/－）の3組のカップルと生島の7名が参加して行われました。アウトドアの企画は、なかなか天候に恵まれませんが、参加者の楽しんでいる雰囲気が伝わることと思います。

参加者・世話役より

★　当日は雨の心配される天気でしたが、幹事の方が苦労して確保された会場ではテントが最初から完備されており、途中からの雨降りもまったく気になりませんでした。私たちは＋－の同性カップルなので、不特定多数の中のイベントには少し抵抗があるのですが、国籍・年齢・性別のいろんな組合せのグループが周りのことを気にする雰囲気もなく楽しくバーベキューしており、私たちも人目が気にならず楽しく過ごせました。

肝心のバーベキューですが、炭火の管理が意外と難しく、火起こしには成功（ちなみに私が火起こし責任者）したものの、いっぺんに炭を熾しすぎてあっという間に肉が焼ける状態になってしまい、焼いては食べ焼いては食べと慌ただしいことになってしまいました。とはいえ鶏肉は皮が香ばしくカリッと焼け、これぞ炭火焼！！という出来だったので、熱いのと食べるのが忙しいのは目をつぶって貰えたのではと勝手に思っています。

バーベキューに欠かせない炭おこし

屋外イベントはその開放的な雰囲気は、他のイベン

トではなかなか得がたいところがありますので、まだ参加されたことのないカップルはぜひ次の機会に参加されてはいかがでしょうか。（次回の火起こしには期待してください！）　（かつや）

★　カップル交流会の参加は三回目、今回は初めて世話役をさせていただきました。気軽に参加して楽しく過ごせて自然に会話ができる企画にしたいと思い、ヒロシ（＋）＆キヨシ（＋）の二人で、インターネットを検索したりディスカッションしたりして、バーベキューに決めました。

参加者は全部で7名、前回、前々回の交流会と比べるとやや少なめで、企画に問題があったのかと不安になり、当日はあいにく小雨が降ったり止んだりの天候で、参加表明をしてくれた皆さんは内心キャンセルしたいなあと考えているのではないかと申し訳ない気持ちになりましたが、悩んでいても仕方が無いと気を取り直して企画を実行しました。

バーベキュー広場に到着して、施設の利用手続きをして機材・食材を受け取り、案内された場所には雨よけのタープが設置されていて一安心。みんなで手分けをしてバーベキューコンロやテーブル、チェアを並べ、炭火をおこして無事に開始となり、お肉や野菜をコンロで焼いて頬張り始めるころには、不安や緊張も解けてほっとしました。

今回は、参加者が少なめだったため、全員がコンロを囲んで顔を会わせる形に座ることができ、また、以前の交流会でお会いしたことのあるカップルばかりだったので、初顔合わせのために緊張するといったことも無く、アットホームな雰囲気の中で、病気や薬、仕事・近況など共通の話題で話し合ったり意見を交換し合ったりできた点が良かったかなと思っています。

カップル交流会に参加するようになって、いろいろなカップルと接する機会を得て、それぞれのライフスタイルや考え方について話をしたり聞いたりすることで、自分達が一歩ずつ前進することに自信がついてきたなと感じます。

次回の交流会も二人で参加して、沢山の人々や仲間・友達などと交流を深めて行きたいと思います

（ヒロシ＆キヨシ）

年末パーティー

3年振りに年末パーティーが、2012年12月22日（土）の午後に開催され、参加者、スタッフ合わせて、33名の方が集まり、和気あいあいとした雰囲気に包まれました。今回は、ネスト・プログラムのための研修を修了した9名が事前準備や後片付けなどで、1名がセクレタリー（受付）でボランティアとして活躍。そのお陰で、とてもスムーズに進行できました。「来年もまたよろしく！」という声を何人もの方からお聞きして、企画した僕らは大いに励まされました。　（加藤／佐藤）

参加者やボランティアスタッフより

「寒い日の暖かいパーティー」　さとし

年末パーティーを開催準備してくださったスタッフの方々、お手伝いの方々大変ありがとうございました。楽しい時を過ごさせていただきました。

年末パーティー準備中の多目的室

告知は2年前で、ぷれいす東京のプログラムに参加し始めたのが今年の夏からでした。楽しみにしていたのでちょっと早めに会場に着くようにしたのですが、既にたくさんの方がいらっしゃっていました。

他のプログラムで御一緒させていただいた方、初めてお会いした方々、皆さんと今年一年の出来事を語り合えました。外は冷え込んでいましたが会場は終始暖かい雰囲気の中楽しむことができました。

何と言っても後半にスイーツパラダイスかと思う程のケーキの数々で皆さん目の色が変わる大盛り上がりで、余った分はお土産に頂いてしまいました。普段はあまりお目にかかることがない、電話でしかお話したことの無かったスタッフの方々と実際にお会いできたこともうれしく思い、また来年同じように楽しむことができるようにこれから一年過ごして行きたいと思っています。

「楽しい時間」　クリス

僕は3年ぶりでネストの年末パーティに参加しました。僕は見知らぬ顔が多いですが、明るい笑顔を絶やさず楽しい時間を過ごさせていただきました。

前より、多目的室は居心地がいいし、年末パーティをやってから、みんな顔が生き生きしてる。僕はデフですが、ボランティア、スタッフ達とも気楽に筆記をして、いいコミュニケーションができると感じて嬉しいです。また、スムーズに筆記の通訳を出来るように感じられました。ご親切に助けてくださってありがとうございました。

ボランティア、スタッフ達、みんな楽しいお正月を迎えてください。ありがとうございます。

「自然体でいられること」　マサヨシ

今回、初めてネスト・プログラムの年末パーティーに参加しました。私はこれまで、このようなHIV陽性者を対象としたイベントに参加したことがほとんどなかったので、少し緊張して臨みました。

参加者は、ネストをよく利用しているという人が多かったようですが、初めてでも話の輪に入りやすい、和やかな雰囲気で、緊張はすぐに解けました。

たとえば、HIV陽性であることをオープンにしていない場所で「健康管理」といった話題になると、本当はHIVのことが一番気にかかっていても、それを隠して会話せざるをえません。パーティーでは、そんなときでも、思うままに話すことができました。そのことが、実にリラックスできて、楽しいものだと実感しました。他のみなさんも、どこか解放されたような面持ちで、「自然体でいられること」を楽しんでいらっしゃるようでした。パーティーの最後には、ネスト・プログラムの様々なイベントが紹介されましたが、私も、ぜひ継続して参加してみたいと思いました。

また、今回はボランティア・スタッフとしても、初参加となりました。私が関わったのは、当日の準備や後片付けだけでしたが、パーティーの成功は、先輩スタッフのみなさんが、入念に計画を進めてこられたおかげだと思いました。これからも、微力ながら、お手伝いさせていただこうと思いますので、よろしくお願いいたします。

「初めてのセクレタリー」 まえだ

本件の事前説明で聞いた「セクレタリーはゲートキーパー」という言葉。気になりながらも、受付手順を把握することに気を取られていました。

当日、入退室カードの情報をいかに“ 隠す ”かに執心していたところに相談員の声。

「カードに書いてある名前は申請したものなのだから隠す必要はない。」その声で、私は情報を隠すことでプライバシーの保護を表現しようとしているだけなのだということに気がつきました。

安心な場は、居合わせた人達の自覚によって維持されますが、場の成立の前提条件である安全を確保するためには綿密な計画と準備がなされます。その方策の一つがセクレタリーを設けることなのだと分かり、ゲートキーパーの意味が腑に落ちました。門の内側の安心を護るために、受付にはルールが必要なのです。そして、セクレタリーはプログラムには参加しないけれど、そこに関わっているのだという実感が湧きました。次の機会も心して臨みたいと思います。

HIV/エイズに関する保健所職員を対象にしたMSMへの理解促進を目的とした研修プログラム

日本で新規に陽性と分かる人の6割以上を占めるMSMへの理解促進のために、MSM首都圏グループ（akta、ぷれいす東京、名古屋市立大学）が企画し、コミュニティセンターや自治体の予算で実施している研修プログラムです。2012年度はさらに地域を拡大して行われています。

HIV/エイズに関する保健所職員を対象にしたこの研修プログラムは、2007～2010年度に「エイズ予防のための戦略研究（研究リーダー：市川誠一）」の一環としてMSM（男性とセックスをする男性）のHIV検査へのアクセスを容易にするために開発され、東京都、神奈川県、千葉県で開催された。2011年、2012年度には1都2県に加えて、埼玉県と仙台市においても開催され、2013年2月には沖縄県でも予定されている。2011年の参加者は111人で、2012年度の参加者は現在のところ101人だ。参加者は主に保健師となっている。

研修の参加者に意識してもらうポイントは、①MSMが受検者の中に含まれると想定されているかどうか。②検査でHIV陽性と判明した際の準備があるか等だ。事例発表、講義、ワークショップ等を組み合わせた5～6時間の研修によって、下記のような効果が見られた。

模擬対応の一コマ。受検者役の反応に聞き入る保健師さんたち。

1）地域で予防啓発を行なうNGOと、保健所などの検査サービス提供者がお互いに顔が見える関係性ができる。実際に顔を知っていると自信をもって推薦できるようになる。「知っている保健師さんたちがHIV検査をやっているから、安心して行ってみて」と。

2）参加者のMSM（男性とセックスする男性）との交流した経験値があがる。MSMの受検者に会ったことがあるかどうかすらわからないと語っていた参加者が、研修のなかで多様なMSMに出会う。

主な研修プログラム（所用時間5～6時間）	
・疫学動向報告	～自治体担当者による報告～
・事例発表	保健所による取り組み
・ワークショップ	「HIV陽性者や周囲の人による手記の朗読」
・講義	「HIV検査におけるセクシュアリティへの理解と求められる配慮」
・講義	「受検者のニーズを知る～受検者を対象にした研究結果のフィードバック～」
・ワークショップ	「MSMの模擬受検者に対する対応と振り返り」
・講義	「MSMむけの啓発資材の紹介」
・振り返りとエンパワメント	

3）受検者による評価情報のフィードバックにより支援の自己効力感が高まる。検査サービス提供者は利用者である受検者の評価に触れていないことが多いため、受検者にどのように貢献できたのかを自信が持てないでいることがある。

4）広域での地域連携やネットワークが広がる。都道府県などの自治体による開催となっているため、地域の行政単位を超えて顔がつながり、経験を共有することできる。

MSMが受検しやすい環境を整備することは、すべての人にとっても役立つ。地域の自治体とNGO等が連携しつつ、こうした環境整備を続けていきたい。

詳しい報告は2011年度のぷれいす東京の活動報告書をご参照いただきたい。

（報告：生島）

内閣府「東南アジア青年の船」ディスカッションプログラム

青少年国際交流推進センターの依頼を受け、ぷれいす東京が内閣府「東南アジア青年の船」の中で各国から集まった35名の参加者へ向けてワークショップを実施しました。

10月31日（水）に、東南アジア諸国連合（ASEAN）と日本が共同開催する内閣府「東南アジア青年の船」の中で、「健康教育（HIV/AIDS対策）」をテーマにした研修を実施しました。グループワークを中心に企画したプログラムに、日本を含め11ヶ国から集まった、35名のユース・メンバーが参加しました。

はじめに各国におけるHIV/AIDSの状況について参加者と情報交換をしましたが、陽性者数や有病率という統計上ではHIV/AIDSの存在がより大きそうに見える国や地域でも、実際にそこで暮らす人々がどれだけその問題を身近に感じているかは様々。ぷれいす東京の普段の講師派遣・研修事業ではお馴染みのワークも英語で行う機会は初めてで、また特に参加者の文化的・宗教的背景などに配慮して臨みましたが、いざ蓋を開けてみると、誰にどのような対策が有効であるかは、言語・文化や地域差よりも各個人の差によるところが大きいのではないかと感じた次第です。参加者からは、自分たちがまずもっとHIV/AIDSについて話して社会の関心を喚起しよう、HIV陽性者が直面する差別やスティグマに対して声を上げよう、といった頼もしい言葉が聞かれました。

今回とても熱心に研修に取り組んでいた参加者が、またそれぞれの国に戻ってからもユースの視点を生かし活躍してくれることを願うとともに、わたしたちも地域で何ができるかということをあらためて考える貴重な機会となりました。（報告：大槻）

“Health Education（Measures against HIV/AIDS）”プログラム

- **Introduction**
  （自己紹介とぷれいす東京の活動紹介）
- **Icebreaker & Ground Rules**
  （アイスブレークとグラウンドルールの紹介）
- **What Do You Think of HIV/AIDS?**
  （HIV/AIDSのイメージのワーク）
- **How Is the Life of People Living with HIV?**
  （手記リーディングのワーク）
- **What Can You Do?**
  （ユースができること）
- **Q&A and Closing Remarks**
  （まとめ～質疑応答）

35人の参加者たちと記念撮影（中央左：生島、右：大槻）

How Is the Life of People Living with HIV?（手記リーディングのワーク）

ワークショップ「What Can You Do?（ユースができること）」

写真提供：青少年国際交流推進センター

部門報告（2012年10～12月）

ホットライン

エイズ電話相談（ぷれいす東京および東京都委託）

ホットライン部門・活動状況　（ ）内は出席人数

10月	7日	ホットライン部門新人研修［第1日］（20名）
	8日	ホットライン部門新人研修［第2日］（22名）
	12日	東京都電話相談連絡会（2名）
	13日～	ホットライン部門モニタリング／実地研修開始
	16日	個別ミーティング（2名）
	21日	世話人会（5名）
		スタッフミーティング（9名）
11月	9日	東京都電話相談連絡会（3名）
	18日	世話人会（5名）
		スタッフミーティング（6名）
	28日	個別ミーティング（5名）
12月	14日	東京都電話相談連絡会（2名）
	15日	個別ミーティング（2名）
	16日	個別ミーティング（2名）
		スタッフミーティング（忘年会）（21名）
	18日	個別ミーティング（2名）
	19日	新人修了ミーティング（2名）
	20日	個別ミーティング（2名）
	20日	フォローミーティング（4名）
	23日	フォローミーティング（5名）

26日　新人修了ミーティング（2名）
27日　新人修了ミーティング（2名）

ホットライン部門の忘年会

相談実績報告

―ぷれいす東京エイズ電話相談―

	10月	11月	12月
日　　数（日）	4	4	4
総 時 間（時間）	20	20	20
相談員数（延べ人）	4	4	4
相談件数（件）	41	37	39
うち（男性）	31	34	34
（女性）	10	3	5
（不明）	0	0	0
陽性者相談	0	1	1
要確認相談	0	0	0
1日平均（件）	10.3	9.3	9.8

―東京都夜間・休日エイズ電話相談―（委託）

	10月	11月	12月
日　　数（日）	12	13	12
総 時 間（時間）	36	39	36
相談員数（延べ人）	28	26	24
相談件数（件）	162	185	152
うち（男性）	126	165	133
（女性）	36	20	18
（不明）	0	0	1
陽性者相談	3	0	1
要確認相談	1	0	2
1日平均（件）	13.5	14.2	12.7

毎年のことですが、この時期新人研修をしています。今年は希望して頂いた方が多くて、シフト運営が厳しい折なので、嬉しいです。次の報告では、現場で活躍している姿をお知らせできると思います。

（報告：佐藤）

Peer Empowerment Program

スタッフ人数　8名

ミーティング

10月　14日　ぷれいす東京事務所（4名）
11月　18日　ぷれいす東京多目的室（4名）
12月　17日　有楽町（2名）

活動実績

10月　14日　ぷれいすボランティアスタッフ女子会

初の試みでぷれいす東京のボランティアスタッフ女子会を、10月14日多目的室にて開催しました。池上さんを始め11名の女性スタッフが集まり、ぷれいす東京に関わるようになったきっかけや今後の活動（セクシャルヘルスブックの改訂等）について意見交換をしました。私たちの部門の課題『セミナー開催時のターゲット層へのＰＲ方法』について他のスタッフから具体的なアドバイスを頂いたり、また、いみとみずの個人的悩み（おじさんと共存できない）にも先輩女子から貴重な教訓を頂戴することができました。

第2回目の開催は3月20日に決定しました。スタッフが思っていることを何でも話せる場にしようと思っているので、是非参加してくださいね。

12月21日に開催予定だったオトナの女的社会科見学ツアー②は2月8日へ延期となりました。参加申込みを頂いていた皆様及びぷれいす事務所スタッフの皆様にはご迷惑をおかけいたしました。

（報告：いみ＆みず）

バディ
陽性者のための直接ケア・派遣プログラム

バディ担当者ミーティング（10-12月実績）

10/4：3名　10/18：7名
11/3：4名　11/15：4名
12/6：3名　12/20：6名
※ 個別ミーティング　8件

利用者数

8カ所の医療機関に通院中、もしくは入院中の20名の方にのべ24名のバディスタッフを派遣

活動内容（2012年12月末現在）

派遣継続中	16件
在宅訪問	16件
病室訪問	0件
派遣休止	3件

10月～12月中の動き

・派遣終了　1件
・派遣調整　9 件

2-4月のミーティング日程

午前ミーティング：
偶数月第1木曜 11:00／奇数月第1土曜11:00
2/7（木）
3/2（土）
4/4（木）
※ 木曜は参加者がある場合のみ開催。事前にご連絡下さい。

午後ミーティング：毎月　第3木曜 18:30
2/21（木）
3/21（木）
4/18（木）

バディの現場から

11月に病院で長期療養をしていた方が亡くなられ、活動が終了しました。10年以上の利用で、これまでに多くのバディが関わった方でした。

9月の合同研修で11名の希望者があり、11月4日（日）にバディ・ワークショップを開催しました。8名が参加し、無事に研修を修了して登録を行いました。

2月17日（日）にバディ・フォローアップトレーニングとバディ交流会を開催予定です。

（報告：牧原）

ネスト
陽性者とパートナー・家族のためのプログラム

ネスト・プログラム参加状況（2012年10–12月）

グループ・ミーティング

・新陽性者ピア・グループ・ミーティング（PGM）第65期
（参加者6名）
10/5　10/19（修了）

・ミドル・ミーティング
10/13（20名）　11/10（22名）　12/8（23名）

・異性愛者のための交流ミーティング
11/16（8名）　12/21（10名）

・Women's Salon
「エイズ国際会議に参加をして〜女性陽性者の視点から〜」
11/17（8名）　※8ページ参照

・陰性パートナー・ミーティング
10/6（3名）　12/1（2名）

・もめんの会（HIV/AIDSを支える母親の会）
10/24（3名）

学習会

・ベーシック講座「社会福祉制度」
10/31（3名）

・ストレス・マネジメント講座第17期
10/22（2名）　11/19（1名）

トークサロン

・介護職として働く陽性者のミーティング
10/15（4名）　12/17（9名）

・就職活動を報告しあう会
10/20（9名）　11/14（2名）　12/15（8名）

年末パーティー

12/22（23名）　※10ページ参照

ミーティング（陽性者メンバー、ぷれいす東京スタッフほか）

・新陽性者PGMファシリテーター・ミーティング
第65期振り返り　11/2（4名、7名）

・web NEST運営委員会
10/23（2名、2名）　12/10（2名、2名）

ピア・ファシリテーターによるプログラム等（厚生労働省委託事業）

・U40（アンダー・フォーティー）ミーティング
〜10代から30代の男性HIV陽性者のミーティング〜
10/13（参加者6名、ピア・ファシリテーター2名）
11/14（4名、2名）　12/13（3名、2名）

・スタッフ研修
10/21（講師2名、参加者14名、ピア・ファシリテーター2名）

10/21（日）の午後、今年度のぷれいす東京合同新人ボランティア研修修了者で、陽性者向けプログラムのボランティアを希望した方を対象に研修が行われました。ボランティア・スタッフ14名に、U40ミーティングのピア・ファシリテーター2名も参加して、グループ・ミーティングのファシリテートの仕方など3時間の研修でした。

（厚生労働省委託　スタッフ研修事業）

ネスト・ニュースレター

10/4：10月号発行　11/5：11月号発行
12/6：12月号発行

（報告：佐藤／加藤／はらだ）

Gay Friends for AIDS
ゲイによるゲイ・コミュニティ向け活動　http://gf.ptokyo.com/

Gay Friends for AIDS 電話相談

10月　7件　（1日平均1.75件）
11月　7件　（1日平均1.75件）
12月　6件　（1日平均1.50件）

聴覚障がい者向けのメール相談対応

10月：0件　11月：0件　12月：0件

「QOGL」スタートしました！

11月3日に、新イベント「QOGL」の第1回を開催しました。初回ということで手探りの部分も多く、またタイトなスケジュールになってしまい反省点も多いのですが、健康やゲイライフのことを考えるシリーズイベントという方向でいけるんじゃないか、という手応えを感じられるイベントとなりました。イベントの報告は7ページをご覧ください。

また、QOGLの第2回を3月20日に開催します！最新の情報はGフレのブログ及びTwitter（@ptokyo_gf）で随時発信していきます。

日本エイズ学会にてGフレ電話相談の演題発表

11月24日、日本エイズ学会初日にGフレ電話相談についての口演発表を行いました。「ぷれいす東京ゲイ向けHIV／エイズ電話相談におけるHIV／エイズ以外の相談（セクシュアリティ・メンタルヘルス等）内容の傾向」と題した発表で、既婚者やバイセクシュアル、また年齢の高いゲイなどの利用が多いGフレ電話相談ならではの内容を発表しました。

（報告：sakura）

HIV陽性者への相談サービス

相談実績2012年10〜12月

	10月	11月	12月
電話による相談	138	145	123
対面による相談	35	46	36
E-mailによる相談等	112	130	113
うち新規相談	27	29	22

※メール新規は含まず

10〜12月の新規相談者の属性（N＝78）

陽性者：	55人	（男性：52	女性：3）
パートナー：	5人	（男性：3	女性：2）
家族：	2人	（男性：0	女性：2）
専門家：	7人	（男性：2	女性：5）
判定保留：	4人	（男性：4	女性：0）
その他：	5人	（男性：5	女性：0）

10〜12月新規相談者の情報源（N＝79）※重複あり

WEB（PC/携帯サイト含）	37件	以前から知っていた	3件
冊子/パンフレット/チラシ	8件	陽性者/パートナー	2件
医療関係者	7件	行政機関	2件
電話相談	7件	スカラシップ	1件
他団体	4件	新聞	1件
人的ネットワーク	3件	不明	4件

10〜12月新規相談の内容

【ぷれいす東京のサービス利用、問い合わせ、積極的参加】
〔関東、九州/沖縄〕
・ネスト・プログラム/バディ利用、利用登録等。計3件。

・新陽性者PGMインテークで来所。計3件。
・ぷれいす東京に連絡。計2件。
・異性愛者交流ミーティング参加希望。計2件。
・ミドルミーティング参加希望。
・U40ミーティング参加希望
・ピアサポートの立ち上げについて。

【検査や告知に関する相談】〔関東、近畿〕
〔判定保留〕
・判定保留で確認検査の結果が出るまでの不安。
・陽性の場合の医療費について知りたい。
・検査でウエスタンブロッドの結果について。
・カポジ肉腫の所見で受検。陽性の場合は何処の病院に受診したらいいか。

【告知直後の漠然とした不安】
〔関東、東海、近畿、中国/四国、九州/沖縄〕
・感染が判ったばかりのため漠然とした不安がある。計4件。
・これからの就労に関する相談。
・他陽性者がどのようにしているのか知りたい。

【対人関係に関する相談】〔関東、近畿〕
・パートナーへの通知。計3件。
・パートナーとの関係性。計2件。
・両親に通知予定。通知に役立つ資料を求めて面談。
・パートナーの主催する乱交パーティーに参加したくない。
・音信を絶っていた元彼と連絡が取れた。この機会に通知する予定。

【生活に関する相談】〔関東、九州/沖縄〕
・生命保険への新規加入の相談。
・陽性判明後、告知せず加入した生命保険について。
・日本に留学予定。通院先や医療費について。
・住宅購入と資金調達について。
・子づくりに関する医療機関の選択。
・人間関係のトラブルにより着の身着のままで上京。
〔就労〕
・今後の就労について。計3件。
・障害枠の面接対応。
・シニア層の就労について。

【制度に関する相談】〔関東、東海、中国/四国〕
・健康保険のプライバシーについて。計2件。
・身体障害者手帳利用時のプライバシーについて。
・転居にあたっての公的制度の手続き。
・副作用のためか仕事に行けない。公的な金銭的補助はあるか。

【心理や精神に関する問題】〔関東〕
・薬物からの回復について。
・うつ傾向による職場や家族との人間関係の変化。

【病気や病体の変化や服薬について】
〔関東、東海、九州/沖縄〕
・サプリメントがHIVに効くか知りたい。
・肺炎治療で退院後味覚障害が出た。主治医からは副作用と言われた。
・以前から子宮筋腫があり今回新たに卵巣膿腫が発見。手術を勧められたが内視鏡術希望。
・HIVに関連のある症状についての相談。
・服薬のタイミングについて医師と相違がある。

【医療体制や受診に関する相談】
〔関東、甲信越/北陸、近畿、九州/沖縄、海外〕
・これからの通院先を検討。計4件。
・死亡診断書からHIVのことが判明するか知りたい。
・医師が自分の訴えよりもデータで状態を判断する事に不満。
・帰国後の医療や治療についての相談。
・留学を検討。海外での治療について。
・クリニックに通院しているが大きな拠点病院の方が安心ではないのか。
・医師の対応に不安。転院を検討したい。

【周囲の人からの相談】〔関東、東海、近畿〕
・(家族)海外にいる陽性の家族が利用可能な情報が欲しい。
・(配偶者)夫が身障手帳を所持。サービス利用範囲での悩み。
・(配偶者)地方にいる夫が陽性と判明。入院先に不満のため転院の相談。
・(陰性パートナー)通知、自分への感染、SEXのときに言ってくれなかった、等の漠然とした不安。計3件。
・(友人)元同居者が陽性と判明。どう接したらいいか。
・(友人)知り合いが未治療でハッテン場に行っている。どうしたらいいか。
・(友人)性的関係のあった人が陽性だったと言ってきた。どうしたらいいか。計2件。

【専門家からの相談や連携】〔関東、九州/沖縄〕
・(看護師)ミーティングついて参加希望の人の紹介。
・(看護師)外国人で言語は英語のみだが他陽性者との交流を希望。
・(薬剤師)薬局を利用している患者の紹介。
・(保健所)不安が強く、何度も受検している方がいる。どうしたらいいか。
・(就労関係NPO)HIVを理由に左遷させられた方がいる。
・(企業人事担当者)社内で障害者の雇用を進めて行きたい。
・(他団体)外国人陽性者に対する支援について。

(報告:牧原/生島/福原/神原)

研修・研究部門

厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業「地域においてHIV陽性者のメンタルヘルス等を支援する研究」

(研究代表者:樽井正義)

10月 2日 ぷれいす東京研究倫理審査委員会にて研究計画2題が受審、通過。
20日 「薬物使用者を対象にした聞き取り調査 ~HIVと薬物依存との関連要因をさぐる」(生島分担研究)のインタビュー調査を開始。
11月 9日 「地域の相談機関におけるHIV 陽性者への相談対応に関する調査」(生島分担研究)の調査票を1,843ヵ所(東京1,033ヵ所、大阪810ヵ所)の行政窓口へ発送(12月末時点で763ヵ所より回収)。
23日 平成24年度第3回班会議を開催(於慶應義塾大学)。参加者7名。

その他、11月24日~26日開催の第26回日本エイズ学会学術集会・総会(於慶應義塾大学)に参加し、シンポジウムや一般演題などで発表。NPO・NGOブースでも資材を展示・配布しました。

HIV陽性者の生活と服薬アドヒアランスに関する調査

（委託元：ヤンセンファーマ株式会社）

11月 25日　第26回日本エイズ学会学術集会・総会共催ランチョンセミナー「服薬の達人への道」にて、HIV陽性者の生活と服薬アドヒアランスに関するインタビューおよびアンケート調査の結果を発表し、冊子「Life & Medicine〜生活の中で 服薬を続けるヒント〜」を発行。くわしくは、5ページの報告をご覧ください。

研修事業

職場研修など

10月 10日　建設・設計会社にて人権研修。参加者6名。

11月 20日　鹿児島県にて研修。参加者38名。

23日　『RENT』LGBT Pride Week出演。

27日　世田谷区にて研修。参加者30名。

12月 1日　「HIV/AIDSイベント佐久2012」トークショーにて講演。

2日　レッドリボンいせはらの日・エイズ予防啓発講演会にて講演。参加者20名。

5日　東京都エイズ予防月間講演会「HIV/エイズと共に生きる－職場の同僚・上司として－」にて講演。参加者80名。

19日　長野保健所にて講演。参加者20名。

21日　NGO-労働組合国際協働フォーラム「HIV／エイズと職場〜労組の役割・求められるリアリティ〜」にて講演。参加者15名。

「MSM（男性と性的接触を持つ男性）へのHIV予防啓発技法」

10月 19日　千葉県にて保健所職員等エイズ専門研修。参加者16名。

11月 7日　神奈川県にて保健所職員等エイズ専門研修。参加者18名。

内閣府「東南アジア青年の船」ディスカッションプログラム

10月 31日　“Health Education（Measures against HIV/AIDS）”の運営に協力。参加者35名。くわしくは、12ページの報告をご覧ください。

（報告：生島／牧原／大槻）

クレジットカードによる寄付［1回のみ／毎月一定額引き落とし］スタートしました！

2013年2月より、ぷれいす東京Webサイト「寄付のお願い」のページから、クレジットカードを使って寄付をしていただけるようになりました。
クレジットカード決済代行会社（アナザーレーン株式会社）のNGO/NPO向け代行サービスを利用しての決済になります。
1回のみの寄付にも対応していますし、毎月一定額を自動的に引き落として寄付をする選択もできます。
なお、今までどおり銀行振込による寄付も引き続きご利用いただけます。
詳しくは、ぷれいす東京Webサイト「寄付のお願い」をご覧ください。

http://www.ptokyo.com/donation.php

私たちの活動へのニーズはますます高まっており、必要な経費も増え続けています。
これらの活動を維持・発展させるために、今まで以上に経済的支援を必要としています。
どうぞよろしくお願いいたします。

振込による寄付

◇ぷれいす東京の活動全般に対する寄付

ゆうちょ銀行振替口座　No.00160-3-574075
特定非営利活動法人 ぷれいす東京

三井住友銀行　高田馬場支店　普通　2041174
特定非営利活動法人 ぷれいす東京

◇ HIV 陽性者への直接支援活動「ネスト / バディ」への寄付

三菱東京 UFJ 銀行　高田馬場支店　普通　1314375
特定非営利活動法人 ぷれいす東京

◇ Gay Friends for AIDS の活動への寄付

みずほ銀行　高田馬場支店　普通　5507255
特定非営利活動法人 ぷれいす東京

少額でもかまいません。1 万円以上寄付された方には活動報告書をお送りします。銀行振込の場合、報告書の送付先をメール／電話 /FAX でご連絡ください。

E-MAIL　office@ptokyo.com
電話　03-3361-8964
FAX　03-3361-8835

編集後記

・春隣…、2 月生まれだけど寒いのが苦手で、春が待ち遠しいと思う日々。4 月から野菜作りをはじめてみようかな？と思い、週末を利用していくつか農園を見学してます。（こんどう）

・ぷれいす東京のお花見は 4 月 7 日（日）の予定。参加者は、ボランティア、医療従事者、プログラム参加者、行政、研究者、企業の方などなど。その幅の広さには自信があります。（いくしま）

・今号は、晩秋に作成準備に入り、年越しで大勢の方々に原稿を書いてもらい、そして梅一輪、ようやく発行となりました。久しぶりに 16 ページの拡大号、じっくりたっぷりご覧ください。（やじま）

編集・発行：特定非営利活動法人　ぷれいす東京
〒 169-0075　東京都 新宿区 高田馬場 4-11-5　三幸ハイツ 403
TEL：03-3361-8964（平日 12 〜 19 時）
FAX：03-3361-8835
E-mail：office@ptokyo.com

ぷれいす東京：http://www.ptokyo.com/
Gay Friends for AIDS：http://gf.ptokyo.com/
web NEST：http://web-nest.ptokyo.com/
Twitter　@placetokyo（http://twitter.com/placetokyo）
Facebook：http://www.facebook.com/PLACETOKYO